



広島市の被爆者、桑原千代子さんの話を聞く

一九八二年以来、女子学院では夏休みに入るとすぐに(今年七月十六日から十八日)高一有志によって「ひろしまの旅」を行っています。参加者は年々増えて、今年は二四〇名のうち一七一名が参加しました。

### 「ひろしまの旅」の重みと感動

青木 秀子

一九八二年以来、女子学院では夏休みに入るとすぐに(今年七月十六日から十八日)高一有志によって「ひろしまの旅」を行っています。参加者は年々増えて、今年は二四〇名のうち一七一名が参加しました。

レポート提出など、かなりきつい準備をいたします。そのスケジュールの中に第五福竜丸見学があります。今年日程上、いろいろと勉強してから見学できたこと、また案内の方の熱心なお話を伺えたことで、第五福竜丸に関する理解が一層深められました。原水爆禁止運動の契機となり、原水爆の恐ろしさを日本中の人々に知らせる事件となった、第五福竜丸の不幸な出来事を、再び起こしてはならないという願いをこめてつくられた展示館の意義は、私共の平和学習にとっても大きな支えとなっております。

「私は今までヒロシマを考えると、広島から離れることは決してヒロシマを忘れることではありません。私が広島で見たこと聞いたこと、感じたことの新鮮味は時と共に薄れてゆきますけれど、ヒロシマの重みは私の胸の奥深くまでしんと沈んでゆき、今では物を考えたり行動したりする時の下地になっているのです。」

### 連載・ヒロシマ・ナガサキ修学旅行を手伝う① 自分の生き方の発見へ

江口 保

「私は思いました。この生きていくヒロシマを多くの人に知ってもらう手段として教師になろうと。そうすれば生徒に具体的なことを教えられるし、広島行きの修学旅行も可能になるかも知れません。ですから、その時のためにも、日本の国民として、もっともっと平和について広い範囲で学んでいきたいと思えます。『この世に平和が永久に続くために、多くの人に語り伝え、自分に出来る精一杯のことを実行する』これが私達の今後の課題なのですから。」

以上の文は、広島修学旅行から帰ったある女生徒が、広島でお世話になった方に宛てた礼状の一部である。

思いを下級生に語り、それが結果的には次々に受け継がれて広島修学旅行は一五年も続くものになった。また、グループを作った生徒達は「原爆の映画を上映する会」という名称で、地域での活動を始めた。ア活動を始めると、「もう一度」夏休みに自分達で広島を訪れる生徒は数知れなかった。そして更に、広島を語る生徒達の熱意で、父母の有志による広島修学旅行が実現された。前後十数年も実施されるまでに至った。また、高校へ進学した生徒達の中には、他校から来た生徒達を巻き込んで、その高校の文化祭で広島や原爆を取り上げ、最優秀賞をもらったり、高校の教師達に広島修学旅行を訴えて実現させたりもした。それらの動きは、私の勤めていた学校の生徒達だけでなく、私の紹介で同じような広島修学旅行を取り組んだ学校からも数々の報告

が届いた。例えば、修学旅行の前に髪を赤く染めた生徒の指導をしたが、その髪のまま広島へ出発してしまった。ところが、修学旅行の翌日はさっぱりした頭で登校したという知らせであったり、また登校拒否を続け自暴自棄にさえた生徒が、修学旅行で広島の人達の生き方に触れ、自分の新しい生き方を発見し、先生達の努力もあって進学し、片道二時間余もかかる短大まで無欠席で通い続け、現在障害者の施設の職員として頑張っているという知らせであったりした。このような連絡は枚挙に暇がないほどである。

私が広島修学旅行を始めたのは一九七六年で、当時東京の葛飾で公立中学の教員であった。その前年、広島まで新幹線が延長し、七二時間という東京都の規制の中でも広島まで行けることが分かり、早速実施するよう計画した。実は私自身も、中学生の時に長崎で被爆し、多くの友達を失った。その重い体験からまず考えたのは、広島で強制の家屋疎開に動員されて亡くなった数多くの中・女学校の一・二年生のことであった。そこで、これら中・女学生のことを中